

「現地を訪問して想うこと」

四藤 一憲

1971年経済学部卒

東日本大震災支援に係わることと云えば、義援金を送ることだけだった。「何かしたい」「何かしなければ」との思いを抱いていたころ、校友会ニュースを手にし、応募した。校友でもあるささ圭社長ご夫妻から、「現地に足を運んでもらい、このことをまわりの人に伝えてもらえればよい」という、お話を聞き、気が楽になった。

女川（おながわ）地区では、カモメをイメージした新駅舎が印象に残った。駅舎内には温泉施設があった。駅前から湾に向かって、商店街が建築中であった。ガイドさん曰く、以前来た時は、更地だったそうだ。急ピッチで復旧しているのである。「女川は流されたのではない、新しい女川に生まれ変わるのだ」の大きな横断幕が、造成中の山肌に掲げてあった。

石巻では、湾内に880メートルの水産加工場が完成していた。高度な衛生管理設備を備えている。沖には、二重、三重の防波堤工事が予定されている。名取市ではガレキはないものの、更地が続き、コンクリート基礎がむき出しになっているところもあった。墓地の墓石が倒れたままであった。ところどころ、台形のように土を盛り上げている隣をバスで通過する。嵩上げて道路となるそうだ。この閑上（ゆりあげ）地区では復興が遅れているように感じた。

塩竈では、にぎり寿司盛り合わせを食した。塩竈は、日本一寿司屋が多いそうだ。マグロ、ウニが口中で溶けて美味しかった。塩竈市と京都市とは縁がある。下京区に「本塩釜町」の町名あり。源融（源氏物語の主

人公光源氏のモデルの一人と云われている) ゆかりのお寺あります。かつて、源融が塩竈を訪れた際、その景勝のよさに心うたれた。都に帰り、六條河原院という別荘を建て、庭園で塩を焼かせた、といわれている。下京区制130周年イベントには市長さんらが上洛された。

宮城訪問を一日延長して、塩竈神社に参拝した。海の見える明媚なところであった。駅前で銘酒『浦霞禅』（懇親会で宮城県校友会の皆さんに振る舞っていただいた）と丹六園の『志保か満』を買った。宮城に美味しいものあり。牛タンは味がしみていて美味しい。一緒に出る南蛮味噌漬けも良かった。みやげに買った。

笹かまぼこは清酒と合う。ささ圭さん工場で作った笹かまぼこはとても美味しかった。これも土産に買い、近所に分けた。

仙台駅はダイナミックに工事中であった。地下鉄も新路線が完成するという。ハード面では地域に差があるものの、着実に進んでいるし、進まねばと思う。人材をいかに確保し、呼び寄せるか、課題だろう。例えば、住宅費の免除とか地方税の軽減も一つの考え。今回、いち早く、校友支援、被災地支援を企画実践されている立命館に頼もしさを感じている。このような機会は、個人では中々できない。いい体験をした。

事務局の方、宮城県校友会の皆さんに感謝申し上げます次第です。